キャリア教育のある視点

キャリア教育が始まって13年経ったようだ。

従来からあった進学指導を拡張し、どのように生きたいかを発達段階とともに、教師等のガイダンス(近年ではキャリアカウンセリングとも言うかな?)を通して、児童・生徒が自分のキャリア設計を行っていきます。

したがって、「テストでこの点数だからあの学校へ進もう」ではなく、「こんな生き方をしたいから、あの学校へ進もう」や「あの勉強をがんばろう」「あんな生き方をしよう」になるのである。

当然、学校に通学する時期だけではなく、社会人になり就職してもキャリア設計は重要になります。

話はちょっと寄り道しますが、他県の工業高校教諭をしている友人がいます。

彼はバブル期に大手有名企業の技術者でした。当時、優秀な人材は企業に就職し、工業高校の技術系の教諭の需要超過になった。彼はどういう経緯があったのか、工業高校教諭へのオファーを受け、企業を退職し教諭になった。無線従事者免許を取得していたため「特別教員免許」により教壇に立った。

(その後教員免許を取得し、社会人大学院では私の学友となった。)

さて、彼のフェイスブックにこんな文章が載っていた。

「コンピュータの世界でハードウェアが正しく動作してプログラムが正しく記述できても実際に動かないことがあります。また、ある場所の条件では動かないことがあります。

私の友人関係では当然と思われるはずのこの話が若い人やデジタルだけをやっている人やソフトウェアのつかい方だけに熱心な人には理解出来ません。電磁誘導、電磁波、ノイズという高校レベルのことが理解できていないのです。

誘導性リアクタンスのものに電流変化が起こると生じる逆起電力の問題は入試問題では理解できてもコンピュータ制御とか通信になると応用力が出ないのです。たとえばノイズフィルタというと、私はオーディオに興味ないとか関連性を無視するのですが、そのような考えだと通信や制御のエンジニアにはならないほうがいいです。パソコンを壊れても簡単な修理ができない人が多いのもコンピュータと電子回路が切り離された近年のことだと思います。」

生徒が興味関心を持って学ぶ、また、指導をしっかり受けて自らの進路を設計し、目的の学校で学ぶことができたとしましょう。ここまではキャリア教育の成功だと思います。しかし、上記の例は、自らの進路に関して、余りにも「道」を狭めて学んでしまった(学ばされた)例です。

機械は絶対万能ではなく、トラブルの原因及に解決が簡単に見出せないものがあります。教科書通り解がないものが大変多いものです。このときに、意外と専門と関係ないところに解を見出すことがあります。NHKのドクターGを見ているとわかると思います。

話を戻しますが、自分の進む道を考え見いだすことは重要なことです。しかし、道だけを見てしまいその脇を見ることができなくなってしまう必要があります。

教員にもあてはまる場合があります。学力向上、生徒指導とともに、社会情勢、雑学、教養、多くの人との交流など、道の脇にあるスキル・経験が求められ、それが意外と有効に働きます。

今日は、ちょっと違った視線でキャリア教育を考えてみました。

※ 引用のフェイスブックの文章は、ご本人の使用許諾を得ております。